



このシリーズをはじめににあたり

陶山淳治（次長・地質標本館長）・神戸信和（地質部）

昭和46年12月6日に地質調査所の筑波研究学園都市への移転が決定して以来 急速に研究本館および実験棟の建設計画に対する諸方策が進捗し 昭和48年3月には標本館の性格および施設設備の前提条件に関する大綱が決定し 所内に“標本館レイアウト小委員会”が設置された。

昭和48年4月から当小委員会は大綱にしたがい 標本館の機能 果すべき役割 展示の基本構想などについて検討し とくに昭和48年から52年にかけて所内の展示プラン担当者として丹青社科学造形研究センター担当者との間での100回を超える打合せ会を開催し 地質標本館パイロットプランの作成を行った。

さらに昭和52年度には建設省の発注により建築基本設計 同53年度には建築実施設計 展示基本設計・実施設計が行われ 同53年度末には建築工事が着手され 同54年度末には建築工事および展示工事は終了し 地質標本館の完成をみた。

なお 建築・展示工事および筑波移転の最中 昭和54年10月には地質標本の分類研究 展示 管理をつかさどる地質標本課（課長・神戸信和）の発足をみ 同55年7月15日の工業技術院筑波研究センターの開所式を契機として同年8月19日より一般公開を開始することとなった。

新たに昭和56年4月1日からは地質調査所に地質標本館長制が設けられたので地質調査所組織細則および事務分掌内規のなかから 関係事項を列挙しておく。

地質標本館長は地質標本館の運営に関する業務を総括整理する。

地質標本館長付は

1. 地質標本館の運営
2. 地質標本館の設備の維持管理 並びに保守
3. 地質標本館に関する広報活動 に関する業務を行う。

地質標本館陳列展示の概略についてはすでに地質調査所要覧 地質ニュースなどに発表されているところであるが ここに“地質標本館便り”を設け 毎号追って陳

列展示の内容や関連事項をやゝ詳しく解説し 地質標本館や地質調査所の研究業務の御理解をいただくことができれば幸である。

地質標本館の建築石材について

松井和典（地質部）

筑波研究学園都市は 昭和54年度でその概成を終えた学園都市の東南部にある工業技術院筑波研究センター内に地質調査所があり 地質標本館は その付属施設として建設された。 当標本館は 地質調査所の研究活動の紹介と地球科学の普及・展示を目的とした わが国でも初めての地質専門博物館で 一般に地球科学の情報を提供している。 建物は 工業技術院筑波研究センター内の研究本館ゾーンと呼ばれている一部にあつて 地質調査所とその隣りの微生物工業技術研究所の両研究本館の中間にある。 研究本館ゾーンは レンガタイル貼りの大きな建物が並んでおり これらに囲まれた環境の中で標本館が一般見学者に分りやすいよう また 建物全体

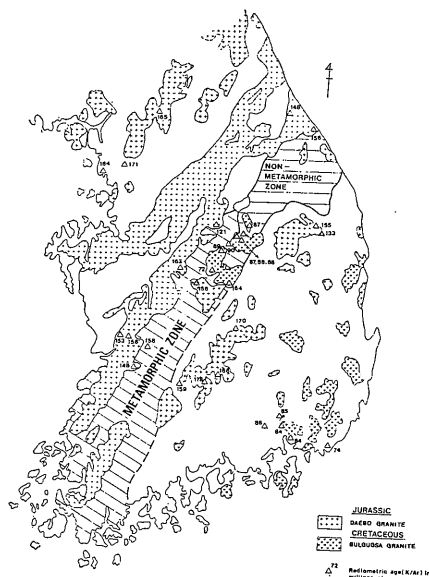


図1 Distribution of the metamorphic and nonmetamorphic zones of the Ogcheon Fold Belt and of major plutons of the Daebo and Bulgugsa Granite Series. (After Geology of Korea, 1975)

の外装が本館ゾーンの色のバランスを壊さない条件で淡紅色を呈するカリ長石を多量に含有している黒雲母花崗岩の石貼りとした。建物の色は常に退紅に見えるが雨に濡れると本館の色に近い淡いレンガタイル色となる。設計者側ではレンガタイル貼りの大きな建物に囲まれた環境の中に研究所の成果品展示を象徴的なテクスチャとして「石張りの建物」としてまとめたと言っている。

建物の構成は中央玄関・展示ホールを吹抜け大空間とし、階高の異なる展示ゾーンと研究・事務ゾーンの分離を断面的に解決している。展示物が岩石・鉱物・鉱石・化石類で特殊な空調条件がないのでランニングコスト低減のため中間期の外気冷房や全熱交換器を設けて排熱の回収と利用を行っている。また展示室の照明は格子状の模擬天井にのせる仕様で展示計画の変更による適当な位置へ自由に移動できるようにしている。

石貼りには安全をとくに配慮し二段ごとにステンレスブラケットを設け荷重を受け各石片をダボでつなぎかつ躯体へ引張りをとっている。この石貼りを玄関展示ホールの壁まで引込み「石室」のような石壁の狭間としている。

外装花崗岩の板の大きさは約90cm×63.5cm×3cm、101cm×63.5cm×4cmで表面はジェットパーナー仕上げ・本磨仕上げ貼りである。石材表面のジェットパーナー仕上げは建築によく使用される工法で切断された石材表面部分をジェットパーナーにより1,000°C以上で融解させるのである。この方法は廉価で均一なテクスチャーが得られ石材表面が滑らかとなるので砂塵が付着し難く床面などに使用すれば歩行時には本磨仕上げに比較して滑り難い利点があるので各研究本

館の玄関床面に使用されている。

地質標本館の外壁や展示ホールの内壁及び階段はジェットパーナー仕上げと本磨仕上げが巧みに使い分けられている。壁面の黒雲母花崗岩中には暗色包有物が多く含まれているが目につき易い場所には包有物の少ない花崗岩が使用されている。この花崗岩は韓国産で詳しい地質関係は明らかでないが中生代ジュラ紀の「大宝花崗岩」Daebo Graniteと呼ばれているものであろう。同岩中の黒雲母で地質絶対年代(K-Ar法)が地球化学課柴田技官によって測定されその結果ジュラ紀花崗岩と推定された。これについてはいずれ詳細な報告が後日発表される。

岩石名：黒雲母花崗岩  
産地：韓国慶尚南道陞川郡佳会面屯内里  
年代：180±4 Ma.  
原石総量：385トン

また地質標本館2階には休憩室があり廊下との仕切り壁にはオニックスが使用されている。設計者側は建物全体が展示品であるという考えで仕切り壁の窓には障子・ガラスを使用せずに透光性の著しいイラン産のOnyx marbleを使用したと言っている。

オニックスは本来縞めのうに対する呼称であるが同心円状の断面をもつ石筍・鐘乳石・石灰華や多くは草色・白色・淡褐色などを呈する縞模様美しい大理石（雪花石膏と呼ばれることもある）などもオニックスと呼ばれる。カイロのモハメッド・アリ宮殿はベージュ色のオニックスで建造されている代表的建物の一つである。めのうの主な産地はブラジル・ウルグアイ・アメリカ・カナダ・南アフリカなどでその他のオニックスの主な産地はアルジェリア・モロッコ・エジプト・トルコ・パキスタン・イタリア・メキシコ・ブラジルなどの諸国である。



図2  
1階展示ホールと2階展示室に連絡する階段。ジェットパーナー仕上げと本磨仕上げの石材でゆるやかな曲面を表現している。

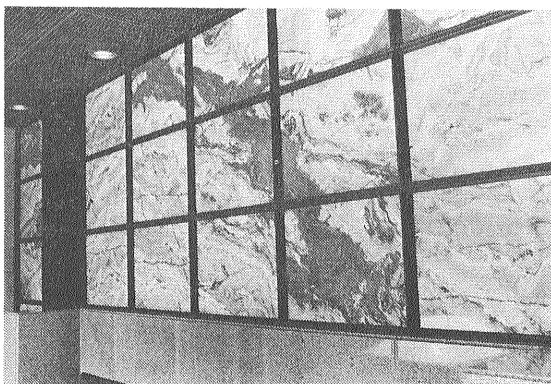


図3 2階休憩室仕切り壁のオニックス